

『旅行雑誌 (China Traveler)』について

王 京 (COE研究員・PD) WANG Jing

2006年の夏に筆者は本プログラムの派遣で上海・華東師範大学を訪れ、2週間の資料調査を行った。

同大学は、大夏大学(1924~1951)と光華大学(1925~1951)を主体に、復旦大学の教育学部、同済大学の動物学部、植物学部および東亜体育専科学校を吸収して1951年に創立されたものである。その後、1950年代に相次いで聖約翰大学、浙江大学、滬江大学、暨南大学、大同大学、震旦大学、江蘇師範学院、上海師範学院から教育、中文、音楽、地理、物理、化学、生物、社会、数学などの学部を吸収し、関連する蔵書を各大学から受け継いでいる。現在、当大学は1949年以前の中国語雑誌だけでも2205種を所蔵している(『華東師範大学中国語雑誌目録(1886~1949)』1986年)。この豊富な資料によって今回の調査は多くの収穫を得たが、ここでは『旅行雑誌 (China Traveler)』について紹介したい。

周知のように、今の中国は空前の旅行ブームの只中にある。21回目の「黄金週」大型連休を迎えた、さる10月1日~7日だけでも、昨年度同期より9.6%増の延べ1.46億人が旅行に出かけ、売上額は1兆円に近いという(10月8日、政府関係部門の記者会見)。一方、中国初の旅行ブームは1920、30年代であり、中国旅行社の活躍はそれを大きく支えていた。

1923年に創設された上海商業儲蓄銀行旅行部が1927年夏に中国旅行社として銀行から独立し、中国初の近代的な旅行会社が誕生した。先だって同年春に創刊された旅行部の『旅行雑誌』(写真1)が同社の機関誌となり、1928年までは季刊、それ以降は

月刊として発行された。『旅行雑誌』は国内外旅行の紀行文、旅行業関連論説、中国旅行社の近況や旅行常識、観光地紹介、交通宿泊事情、時刻料金表から美術、撮影、小説に至るまで多彩な内容を持ち、初期の中国旅行産業研究の基本文献であると同時に、同時代の社会文化研究にも貴重な資料を提供している。同誌の内容の中で筆者が目にするのは、主として以下の2つである。

一つは日本関係の記事である。創刊号の「本年の日本花見旅行団」はその第一弾であった。12人1組で4月1日から15日にかけて長崎、京都、東京、日光、大阪、宮島、別府などを遊覧するツアーの募集で、詳細な日程表も載せられている。同記事では前年1926年に組織された初回花見旅行団のものとして、2枚の写真に掲載しているが、その1枚は澁澤榮一の邸宅におけるもので、写真前列中央の老紳士は澁澤であった(写真2)。

花見と澁澤とは一見妙な組合せのようであるが、中国初期の旅行業と金融業との密接な関係を考えれば不思議ではない。王伯元、張頌周、譚海秋などの面々も見られる花見旅行団の目的は、決して単なる観光ではなく、日本の金融界・実業界との交流も図られていた。澁澤の行動予定表である「集会日時通知表」同年4月17日(土)の項ではこの旅行団について「中華民國上海実業家廿余人」(『澁澤榮一伝記資料別巻第二』p.668)と記している。

その後も日本旅行の記事は時局の影響を受けながらも度々見られ、1937年5~8号に連載された余大雄の「東茗小品」を最後に誌面から姿を消した(表1)。これらの記事を分析し、日中戦争までの約10年間における中日交流の在り方の変化、中国人の日本認識の変化などを検討することが可能であろう。

表1: 『旅行雑誌』日本旅行関連記事年別回数表

年	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37
回	3	6	2	4	9	1	0	3	4	4	6

もう一つは民俗・民族学関係の記事である。『旅行雑誌』において、1928年までの国内旅行記事は専ら名勝地に集中していたが、1929年からその範囲が広がり、特に

写真1



『旅行雑誌』創刊号(1927年春)表紙

辺境地域に対する関心が高まっており、例えば程志政訳「西藏の一瞥」(3-6) 趙君豪「東北履痕記」(3-8~12、4-2) 伯時「滇黔苗話」(4-8)など、辺地の民族や風俗などを主題とした文章も多くなってきた。

これは北伐の結果として、1928年12月に南京国民政府によって、形式的ではあるものの、辛亥革命以来の全国統一が実現されたことと関連する。これまで無関心だった国内の僻地を、統一されるべき「辺境」、その住民を「団結」すべき「自民族」の一部として強く意識するようになったことは、上海を代表するグラビア総合誌『良友』画報の同時期の旅行関連記事にも確認できる(拙文「『良友』の旅行関連記事 1920~40年代の旅行と近代国家」『アジア遊学』103号、2007年9月を参照)

日中戦争勃発後も、『旅行雑誌』は上海で発行され続けた。1938年11月、観光地を中心としながら初めての地域特集「西南専号」(12-11)を編纂し、やがて黄炎「西康調査日誌」(1939年5~7号連載)のような本格的な調査報告も登場するようになった。

1942年8月、桂林において旅行社直轄の出版機関が創設され、12月まで同時に上海版と桂林版が発行されていた。編集部が桂林に移った17-1(1943年1月)以降、誌面では熟練した研究者による西南、西北地域に関する学術的考察が主流となり、民俗・民族学雑誌の様相を呈し

写真2



1926年日本花見旅行団(『旅行雑誌』創刊号 16ページ)

ていた。これらの文章から、当時、民俗学・民族学の課題及び研究手法を分析し、戦時中同誌が持った意味を学史において位置づけることが今後の課題である。

なお、編集部は18-6(1944年7月)より重慶に移動し、1946年に上海に戻ったが、雑誌は1949年まで中断することなく発行されていた。以降、同名雑誌は台湾(雑誌の創始者によって1950年3月まで)と大陸(接收された雑誌社によって1955年まで、以降『旅行家』と改名)でそれぞれ刊行されていた。

華東師範大学の所蔵は1945年初ままでであるが、中国国家図書館、京都大学人文科学研究所、国際日本文化研究センターなどの所蔵と比べ、戦時下の激動期である1937年以降も欠号が少ない点は貴重であると言える。

Voices of Young Scholars 7

浮世の麗しい影 浮世絵の美人絵略論

衣 曉龍(華東師範大学中国民俗保護開発研究中心博士生) Yi Xiaolong

2007年7~8月の間、神奈川大学21世紀COEプログラムの招きで、日本で浮世絵芸術を研究する機会を得た。二週間という短い期間ではあったが、拠点リーダーの福田アジオ教授や指導教員の田上繁教授をはじめとするCOEの方々のお陰で、充実した研修生活を送ることが出来た。この場を借りて、感謝の気持ちを伝えたい

と思っている。

浮世絵は流派や分類が多いため、その内容も複雑で入りくんでいる。本文は浮世絵芸術の中で、最も重要である「美人画」から出発し、浮世絵芸術について簡単に述べたいと思う。

「浮世」という言葉は元来仏教用語である。日本では、